

受付番号

## 留学・研究計画書

氏名 下田 誠	留学機関名 中国社会科学院歴史研究所
留学先国名 中華人民共和国	留学期間 西暦 2009年9月～2011年8月
研究テーマ 20世紀中国における学術史の展開に関する基礎的研究—文明起源・早期国家論を中心に	
研究テーマの説明 (テーマの学術的・社会的意義についても記載してください)	
<p><b>【研究の背景】</b></p> <p>歴史学研究において、時代・地域を問わず、個別細分化が指摘されるようになって久しい。同じく東洋史ないしは中国史、そして中国古代史を専門とする研究者間においても、個別的課題については、相互交流に困難をきたすことも多い。</p> <p>21世紀を迎え、地球規模の一体化はかつてない速度で進展し、経済・文化・環境といった面について世界はますます緊密な結びつきを見せるようになった。それは情報技術の革新的発展を背景とするものだが、歴史学研究もまたこうした時代状況の変化に応じ、新たな全体性の回復に向けた歩みを続けている。</p> <p>申請者は今回、新たな研究を開始するにあたり、これまでの研究過程において温めてきた「学術史」の方法から、全体性回復に向けた試みを開始したいと考えている。</p> <p><b>【研究上の課題】</b></p> <p>「学術史」とは李学勤氏の一連の著作における使用を意識している。所謂「史学史」と近い用語であるが、もう少し大きな枠組みを考えている。資史料に関わる歴史文献学・考古学・古文字学だけではなく、研究の背景や方法をなす社会科学と自然科学、そして現代思想をも含み込む学術の歴史、学術の動向全体をつかもうとする試みである。それは膨大な雲を掴むような取り組みであるが、ここでは文明起源・初期（早期）国家研究を軸に「学術史」に迫ろうと考えている。</p> <p><b>【学術的意義】</b></p> <p>日中両国の「学術史」的交流を進めるために、申請者は中国における文明起源・早期国家（初期国家）に関する議論に注目している。文明起源・早期国家研究は、一方で先秦史分野の個別研究を総括する側面を持っており、また他方、20世紀中国における学術の動向を窺う上で最適なテーマの一つでもある。</p> <p>中国において日本の「学術史」を、日本において中国の「学術史」を申請者が発信していくことは非常に大きな学術的意義を持つものと思われる。</p> <p><b>【社会的意義】</b></p> <p>これまでも高等学校・大学における教育や博物館における展示・通訳業務、カルチャーセンターにおける講座の担当、日本学術振興会アジア研究教育拠点事業のプロジェクトの企画する一般市民向けフォーラム・シンポジウム、東アジア学交流講座の運営などの形で社会貢献を果たしてきた。考古学とはまた違った「学術史」の方法から総合的に文明起源・早期国家の研究を発信していくことは、社会的意義を持つことだろう。</p>	

# 成果報告書

記入日 2011年 3月 25日

氏名	下田 誠	留学先国名	中国	所属機関	中国社会科学院歴史研究所
研究テーマ: 20世紀中国における学術史の展開に関する基礎的研究—文明起源・早期国家論を中心に					
留学期間	2009年 4月 ~ 2011年 3月				
<p>第一部 北京生活</p> <p>私にとって、今回の中国研修は忘れがたい貴重な時間となりました。改めて審査にあられた先生方、そして留学生生活を支えてくださった松下国際スカラシップ担当の皆様にご心からお礼申し上げます。また受け入れ先の中国社会科学院歴史研究所の諸先生方にも深く感謝申し上げます。以下、私の留学生生活全般に関する感想をまとめます。</p> <p>(1) 住居と食生活</p> <p>2年間で5回居所をかえ、大変苦労しました。これは隣人との関係といった程度のものではなく、やむにやまれず転居を繰り返しました。ただし、これをもう少し広い文脈の中で考えてみると、実はここ数年の北京の不動産バブルや社会の劇的な変化の影響を私も受けていたのだと思います。</p> <p>また私の所属である社会科学院の大学院全体の引越しが問題をいっそう複雑にしていました。私はその大学院の招待所に1年半ほど滞りましたが、今年1月に大学院は望京から良郷へと移転しました。私は望京に留まり、最後の3ヶ月は「合租」というルームシェアのような形態の住居に4人の中国人と共同生活することになり、さながら現代中国の人類学者のような経験をしたのです。</p> <p>食事は研究生院の招待所に滞在したころは、価格の安い学生食堂でよく食事をしました。ただ、1年半も過ぎたころから、自分の食事に対する嗜好を自覚し、自分の身体の欲するところに従うことにしました。詳しくお伝えすることはできませんが、要するに日本料理や欧米化した食文化に適合した自分を改めて発見したということです。</p> <p>(2) 社会と政治の一側面</p> <p>すでに留学進捗状況報告書で報告しましたとおり、初年度に10万円以上投じて予防接種を受けたことは、狂犬病の広がりなど現代中国の一側面を示していると思います。それから初年度はH1N1の影響が深刻であり、12月に予防接種を受けるまでは心配でした。二年目は日中間の尖閣諸島問題、最近ではジャスミン革命に呼応した集会などで緊張しました。昨年10月には大使館からの通知もあり、公共の場での日本語の使用を自粛するなど注意しました。情報統制は事の外念入りであり、劉暁波氏のノーベル賞受賞なども日本からの電話で知る始末でした。</p> <p>(3) 研究環境</p> <p>今回、私は訪問学者(教員)として派遣していただいたことに大きな意味があったと考えています。10年前、長春に1年間滞在した際は、学生であり、交流の範囲や視野にも限界がありました。今回先秦史研究室13名のスタッフの中で同僚として認められ、さまざまな会議に参加できました。これによって研究を取り巻く組織や体制、学術の展開について理解を深めました。職場には20代・30代の研究者も多く今後の交流を考えても有意義であったと考えています。</p>					

#### (4)おわりに

中国の発展はめざましく、2009年4月から研修を開始した私は北京オリンピックにともなう開発の恩恵を受けた留学組といえるでしょう。私の滞在期間中にも、北京では6本の地下鉄が営業を開始し、友人とは「10年前には2本しかなかったのに」と話をしたものです。昨年の上海万博もまた中国の発展を世界に示したイベントでした。一方で、『大志』10号にまとめましたように国内の格差の問題は深刻であり、不満は鬱積しています。この国の舵取りの難しさを改めて感じさせられます。

## 第二部 研究成果

私の研究課題は20世紀中国の学術の展開を、文明起源・早期国家論に即して把握することです。その課題に迫るため関連図書・論文を収集しそれらを精読する傍ら、自ら積極的に学会発表を行い各種のシンポジウムや授業に参加し、多くの学者・学生と交流し、また共同調査・巡検を実施しました。

### (1)学会発表

学会発表は以下の通りです。受け入れ教授(宮長為研究員)が先秦史学会の秘書長であったため複数の学会に参加できました。中国古代史分野において、いまだ十分ではない世界史あるいは社会科学的歴史学を方法論とする研究者間の交流の促進という当初の課題の一つは、ある程度実現できたと考えています。

1. 「関于20世紀中国学術史進展的基礎研究—以文明起源与早期国家論为中心」紀念王懿榮發現甲骨文110周年國際學術研討會、山東省煙台福山区、2009年8月14日 参考記事：<http://www.xianqin.org/blog/archives/1858.html>
2. 「奚仲文化・薛国歴史的啓示」第二届中国奚仲文化研討会(中国先秦史学会など主催)、山東省棗莊薛城、2009年11月10日
3. 「簡介《中国古代国家形成与青銅兵器》」先秦史研讀班第八期(中国社会科学院歴史研究所先秦史研究室主催)2009年12月18日 参考記事：<http://www.xianqin.org/blog/archives/1847.html>
4. 「盧氏令戈考」長江・三峡古文化學術研討会暨中国先秦史学会第九屆年會(会場:中国重慶市、大礼堂賓館)2010年6月14日 『報告概要』pp. 66~67(『長江・三峡古文化學術研討会暨中国先秦史学会第九屆年會論文集』収録予定)

こうした報告はすべて中国語でおこなわれ、とくに09年の先秦史研讀班における報告は2時間半、発表者は1人だけ、報告・討論を行う会であり、その準備に3ヶ月を要しました。

### (2)授業への参加

現在中国における先秦史の研究はおもに考古学と古文字学に分かれ、それぞれ専門的な技量を必要とします。私も博士学位論文の執筆後より課題となっていた古文字学に根ざした研究を進めるため下記の大学院の授業に参加し、その技術の向上に努めました。また2010年10月から派遣期間終了までは本研究課題の推進のために英語力の必要を感じ英語学校に通い、中国語を通じて英語を学ぶ経験をしました。

1. 李学勤教授(清華大学歴史系) 西周金文に関する講義  
2008年度後期(2009年5月~2009年6月)、2009年度前期(2009年10月~2010年1月)、  
2009年度後期(2010年3月~2010年6月)
2. 黄天樹教授(首都師範大学中文系) 甲骨文字に関する講義 2009年度後期(2010年3月~2010年6月)
3. 劉源研究員(中国社会科学院歴史研究所) 史記周本紀と説文解字に関する講義  
2009年度後期(2010年3月~2010年6月)
4. 黄正建研究員(中国社会科学院歴史研究所) 天聖令に関する演習 2009年度後期(2010年4月~2010年6月)

(成果報告書)

### (3) 読書班・講演会・シンポジウムへの参加

2009年度から2010年度にかけて先秦史研究室において実施された先秦史料研読班に8回参加し、その他、主に先秦史に関する講演会に9回参加しました。また、前述の私自身報告を担当したシンポジウム以外に、下記のシンポジウムなどに参加し中国文明に対する理解を深めました。1番のプロジェクトには私も参加研究者の一人として参与していました。

#### 1. 国際学術シンポジウム「東アジア海文明の歴史と環境—日中韓研究者の語る東アジア海文明の未来像」

(2010年2月27日・28日) 日本学術振興会アジア研究教育拠点事業「東アジア海文明の歴史と環境」主催 於学習院大学

#### 2. 商周文明学術研討会(2010年5月15日) 北京師範大学歴史学院主催 於北京師範大学

#### 3. 中国古文字研究会第十八次年会(2010年10月22日) 中国古文字研究会主催 於北京香山飯店

### (4) 研究成果

本研修期間に発表した(あるいは近刊の)本研究課題に関連する研究成果は下記のものであります。

#### 1. (書評)「岡村秀典著『中国文明農業と礼制の考古学』、『歴史評論』716、99頁-104頁、2009年

#### 2. (新刊紹介)「宇都木章著『出土文物からみた中国古代』、『歴史学研究』861、55頁-56頁、2009年

#### 3. (訳注)「龍崗秦簡訳注(前編)」(佐々木研太氏との共著)『中国出土資料研究』第14号、150頁-218頁、2010年3月

#### 4. (翻訳)「呂宗力著『民間言語と漢代の社会・政治—流言・訛言・妖言・謠言を中心として—』

『日本秦漢史学会会報』第10号(近刊)

また、本研修期間に他の経費を受けて発表した研究成果は下記のものであります。論文内容は本研究課題とも関連します。

#### 5. (論文)「日本武器形青銅器と中国戦国時期三晋青銅武器との接点を訪ねて—兼ねて『物勒工名』形式銘文の一事例—」鶴間和幸・鐘江宏之編『東アジア海をめぐる交流の歴史的展開』東方書店、3頁-28頁、2010年

#### 6. (論文)「中国戦国時期青銅器銘文の史料化に関する一試論—三晋紀年銅器銘文の字形分析を中心に—」『学習院大学文学部研究年報』(学習院大学文学会)第57輯、2011年

### (5) 共同調査・巡検

本研修期間に、中国文明の形成と展開に関連する遺跡や博物館を多数訪問しました。とりわけ①紅山文化(新石器時代)の遺跡調査(2009年6月30日~7月4日)と②河南博物院における戦国三晋時期青銅武器の倉庫資料調査(2010年7月27日~7月30日)は、特筆に値する充実した調査となりました。なお、後者の国内旅費は別経費によるものです。

①は現地の考古学者の全面的な協力を得て、紅山後遺跡・牛河梁紅山文化遺址、博物館などをめぐり、遺跡や遺物に対する見識を深め文明起源と早期国家の研究に迫る起点を得ました。同調査は韓国人研究者と共同でおこない、多様な認識にふれることができました。②は発掘整理時の担当者の協力を得て、倉庫内にある未公開資料の実見・模本作成を通じて、三晋青銅器の性格に対する新たな認識を得ました。この調査も中国社会科学院の若手研究者と共同でおこないました。

そのほか、太原の山西博物院(2009年9月15日~17日)、済南の山東省博物館・済南市博物館(2009年12月8日)、上海の復旦大学と南京の南京博物院(2009年12月10日~12日)、大同の雲崗石窟・北岳恒山(2010年5月8日)、安陽の殷墟博物館(2010年5月16日)、四川省三星堆博物館・樂山大仏・四川博物院・重慶三峡博物館・峨眉山(2010年6月10日~17日)、北京故宮博物院(2010年5月23日)、北京首都博物館の考古中華特別展(2010年8月17日)、陝西省の唐乾陵・法門寺・陝西歴史博物館・半坡博物館(2011年3月10日~12日)、洛陽の龍門石窟・白馬寺・周天子駕六博物館(2011年3月20日~21日)などさまざまな地を訪問し、文物を実見し、中国文明の性格に対する考察を進めました。

### 第三部 研究内容(1)研究背景と研究目的

中国古代国家の形成の具体的な道筋はすでに戦中から戦後にかけて、侯外廬・郭沫若らによって史的唯物論の方法に基づき論じられてきました。文革を経て、改革開放の時代、考古発掘の黄金時代の到来とともに考古学の研究者を中心に文明起源・早期国家の議論が盛んに発表されるようになりました。とくに夏鼐・蘇秉琦・張光直・嚴文明らの研究者は中国文明の形成に独自の見方を提出し、現場の考古発掘にたずさわる者たちに指針を与えました。かつての黄河文明一辺倒から多元的な文明の展開が明らかになり、目下、多元的な文明起源論は複合民族国家として現代中国を下支えしている側面もあります。

しかしその際のひとつの問題点は、夏商周から戦国秦漢への展開の解明が弱い点であり、すでに渡辺信一郎に指摘のあるとおりです。私は帝制中国の官僚政治という視座から自身の戦国三晋を中心とした研究を位置づけ直し、また一方で現在の世界で進行中の新たな民主主義の構想をふまえ、部族国家や領域国家などの概念を鍛え直したいと考えています。

戦後日本の中国古代国家(形成)論はかねて上記の課題を追求し、すぐれた研究蓄積を持っています。しかし誤解を恐れずにいえば、いささか内向きな面があり、さらに日中あるいは世界の研究者との積極的な交流が期待されます。要するに、戦後日本の中国古代国家論とは20世紀世界の学術の展開の中にどのように位置づくのかという課題です。

ここでは、紙面の制約もありますので、私も調査をおこないました紅山文化をめぐる20世紀中国学術の展開を概論することで、研究内容の一部の紹介としたいと思います。

#### (2)研究内容 その1 紅山文化からみた文明起源・早期国家

紅山文化は今を遡ること5000年ほど前の新石器文化であり、燕山南北(遼寧省西部・内モンゴ南部)に広がる考古学文化の一つです。以下、紅山文化の代表的な遺跡である牛河梁の発掘にたずさわった郭大順の回顧に基づき、文明起源・早期国家の学術史的展開をまとめます。紅山文化の発掘には日本人も関わっており紅山文化の研究には独特の意味があります。

1908年鳥居龍蔵は内モン自治区赤峰市を調査しその先史時代の重要性に注意しました。1935年赤峰紅山後にて日本の東亜考古学会は新石器時代の遺構を発見し、大量の石器・陶器を出土しました。1938年『赤峰紅山後—満洲国熱河省赤峰紅山後先史遺蹟—』を出版しています。その後、1950年代に尹達は『中国新石器時代』のなかで梁思永の提案を受けて紅山後の欄を設け、これを「紅山文化」と名づけました。ただし1970年代まで中国考古学では文字・金属・都市の出現を「三要素」として中国文明の起源を語るのが主流であり、そうした特徴に合致するのは中原の二里頭、商代二里岡、安陽殷墟などでした。70年代末、蘇秉琦による考古学文化区系類型学説の提唱があり、三要素の束縛を離れ多元的な中国文明の探索が可能となりました。とりわけ紅山文化が注目されたのは、上記の提唱と時宜を同じくして東山嘴・牛河梁の発掘があり、その主たる内容として、文字・鑄銅遺跡・城壁をほとんど欠くなかで大規模な宗教祭祀施設(祭壇・女神廟・積石家)と玉器群を持つことでした。これは三要素への挑戦であり、また「礼制」を中心とする点は中国の伝統的特色により合致するものと理解されました。

そもそも紅山文化は原始社会なのか、文明段階なのか、議論がなされるなか蘇秉琦はこの遼西地区の考古資料を中心に利用して、「古文化・古城・古国」という著名な観点を提出します。そしてその論を裏付けるように80年代以降六大区系それぞれから空一面の星(“満天星斗”)のように古城・古国の手がかりが発掘されました。80年代後半から90年代にかけ、蘇秉琦は再び文明起源と国家形成について新たな提案をおこないます。それは三部曲(古国—王国—帝国)、三模式(原生型・次生型・続生型)であり、彼は紅山文化を古国段階の原生型の国家と捉えました。そして郭大順らは現在、紅山文化について多くの原始氏族共同体の内容を保持しつつも早期国家の基本的特徴を備えるものと認めています。

紅山文化は現在に続く文明起源論の活性化の契機をつくった存在でもあり、私は20世紀中国の学術の展開をたどる上で適切な対象と見ています。私はこうした古国を部族国家として捉えられるという見通しをもっていますが、さらに検討を進める必要があるでしょう。私はこの『中国文明を読む』プロジェクトを二年の研修をふまえ、さらに発展させたいと考えています。